

〈あのころの「誌要」〉『日本文学誌要』にみる廣末保先生

浅沼, 璞

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

2019-07-27

〈あのころの「誌要」〉

『日本文学誌要』にみる廣末保先生

浅沼 璞

授との対談のなかで、先生はこう述べておられる。

特集号をつくるからと言われたんだけど辞めて十年にもなることだし、テレくさいし、出来るなら辞退したいと申しあげたけれど、あまり我をおしてもなんだし、それから、ふと、これは僕の追悼号になるんじゃないかという気がしたりしましてね。

残念ながらそれは現実となり、約三年後の『誌要』四八号には先生追悼の弔辞が五篇掲載されることとなる。

当時、私は高校教諭をつとめながら、俳句や連句の創作に手をそめていた。西鶴研究も続けていたけれど、実作体験を重ねるうち、芭蕉への関心が深まっていった。きっかけはやはり廣末先生の芭蕉論だったが、わけても『誌要』三三号（一九八五年一月）の講演録「主体離れの主体」には蒙をひらかれ、なんども読みかえた。この講演録のスリリングなところは連句作家の主体性の問題を、総論・各論にわたって多義的にとらえ返している点にある。まず総論から引用してみよう。

「西鶴における俳諧と浮世草子」に定めた。だから十年後の「退職記念特別号」は腑に落ちなかったのである。じつさい先生は還暦を期に専任を勇退されていた。ただその後十年、非常勤講師を果たされ、節目の「退職記念特別号」ということだったようである。同号の、藤田省三教

前の人の句に次の人である私が句を付けるという場合、私にとって前の人がどういう句を読むかは全然わからないわけです。つまり、自分にとって前の人のイメージというものは、まったくの偶然なんです。

ここで注目したいのは、連句を語るに際して〈私〉という主語をおいていることである。共同制作が前提の連句の場合、作者A、作者Bというように三人称で論じるのが一般的である。それをあえて〈私〉としたのは、「連句作家の主体性」を扱った講和内容にリアリティを持たせたかった先生の工夫ではないだろうか。

これに続く総論の内容を要約すると以下のようになろうか——即興的にその場で句を付ける偶然性を連句は前提としているけれど、作者（私自身）の力量に見あった意図あるいは主体的なモチーフがないわけではない。ただそれは前句との一回性において与えられたものであって、持続した主体ではない。自分の句は責任をもって付けるけれど、それが新たな付句によってどう変化するか、まったく責任をもてない。むしろ主体的に自己完結したイメージを作りあげてしまわないことによって次の人のイメージを喚起する。したがって近代的な主体概念とはちがった主体概念を考える必要がある——。

前句を受けとった〈私〉の主体性は、次の作者へと句を手渡すとき、転じられる。先生は「三句の転じ」という連句用語を使わずに、三句における主体の「転じ」を深く語っているのである。各論のなかでも〈連句の最小単位は三句〉と念を押しながら、具体的に次の「三句の転じ」を取り上げていく。

追たて、早き御馬の刀持

去来

でつちが荷ふ水こぼしたり

凡兆

戸障子もむしろかこひの売屋敷

芭蕉

歌仙「市中は」の巻（『猿蓑』）

最初の二句は、馬をよけようとした丁稚が荷っている水をこぼした、という日常的で動的な生活空間。それを芭蕉は、むしろで囲って売りに出されている家の、置き忘れられたような空間へと転じていく。ところが芭蕉自筆の草稿によると凡兆の初案は「童（わっぱ）が糞（こえ）をうちこぼしけり」であったという。ここに先生は着目する。

もともと芭蕉の付句は、凡兆の「糞をうちこぼしけり」という前句に対してのものであった。にもかかわらず、凡兆が「水」の句に変えることを芭蕉は許容した。先に「前句を受けとった〈私〉の主体性は、次の作者へと句を手渡すとき、転じられる」と要約したけれど、「前句を受けとった〈私〉の主体性」すらここでは非主体化されてしまっているわけである。「糞」に付けたイメージが「水」に付けたイメージへと変貌する、その新たな偶然性を芭蕉は受け入れていたことになる。〈ある意味ではイカサマのような感じがしないでもない〉と先生は付言する。折から現代連句の推敲過程にイカサマを感じていた私は大いに首肯するほかなかった【注】。

最終的に先生は次のように自問自答する。

芭蕉が俳諧や風雅にたいする対しかたは、近代的な主体概念をそこに持ち込んでもかまわないくらい主体的です。にもかかわらず、このように非主体化されることを許容する。非主体化される（する）ことを許容することによって、連句という俳諧形式と主体的に交わろうとしている、その主体とはいったいどういう主体なのか。

総論で言及した、次の作者に対して〈主体的に自己完結したイメージを作りあげてしまわない〉という完結拒否の発想と、前句作者の推敲を許容するという非主体的な発想とはどこかで繋がっているにちがいない。この後、そう言いかけながら、その二つをへかんたんに同一視することもできない〉と先生は反転する。総論と各論を巧みに重層化させながら俄かに反転する。そして〈偶然を発見へと価値転換する主体といったものを想定してみることができると結ぶのだが、それだけではない。〈ことばにたいする、あるいは断片にたいする主体的な責任ということからみれば、いささかイカサマに見えるものを正当化しうる方法を私は探している〉と言いそえる。いま読んでもスリリングな展開だ。私が今日まで連句実作を続けることのできたそのモチーフの根源がここにはある。

注

厳密には「膝送り」と「出勝ち」という座の運営方法が連句にはあり、そこに「捌」というコーディネーターの主体性がかかわってくる。とはいえ「捌」という呼称は江戸末期からのものであり、今回はそこまで立ち入らないでおいた。ただ『去来抄』によると（廣末先生も講演で言及されているが）、凡兆は芭蕉に相談のうえで「糞」を「水」に改変していた。「捌」的な役割を芭蕉が果たしていたこともまた忘れてはならないだろう。

（あさぬま はく・日本大学教授・本学兼任講師）